みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

29　泣いて泣いて人になる

第二十九日め（四月十三日）

きのうは、あまりに風がつめたく、つよかったので、群れをふたたび石垣ヘレムのなかにかこった。しかし、天候がややおちついてくると、夜中のうちに、群れを囲いからだした。

「テンゲル、トクトソン」

つまり「天がさだまった」といいながら、家人たちは夜中に起きだして、群れを囲いのそとにつれだしたのだった。

群れの放牧にとって、固定的な施設が、いかに付属的なものにすぎないかがよくわかる。天候が回復しさえすれば、すこしでもはやく、群れをオープンスペースでやすませようとする。モンゴルにおいては、群れというものは決して物理的にかこうべきものではないのである。

午前六時、マイナス三度。いちはやく、セルゲレンが、哺乳補助の作業をはじめていた。きのうとおなじ作業なのだが、これまでみたことのない姿勢でヤギをつかまえている。小さな子ヤギに寄乳させるために、ヤギのうしろから近づいて、まるで搾乳でもしているように、下腹部をつかんでいる。つかまえられているのは、乳の出がよく、おとなしい性格の、青毛のヤギである。これまでも乳母にされてい

た。しかし、こんな姿勢での捕捉はみたことがない。
「なにしてるの?」
とわたしがたずねると、セルゲレンは、
「デレンデジ、バイナ」
と簡単にこたえた。デレンデフという動詞をつかっている。乳房を意味するデレンという名詞から派生した動詞は、乳房をもつという意味になっている。子畜のために乳房をつかんでいる姿勢が、まるで搾乳をしているようにみえる。
「そういう姿勢はみたことがない。めずらしい」
というわたしに、セルゲレンは、
「こうすれば、いたいから、にげないのよ。わたし、一人だから」
と応じた。乳房をつかまえれば、ヤギやヒツジはおとなしくなってにげない、という。そりゃあ身動きすれば痛かろう。女性が一人で、一頭の母畜をおさえながら、他の子畜をもってきて乳房をあてがうという作業は、それほど簡単なことではない。これまでは、モージやだれかが手伝うことも多かった。また、一人なら、壁を利用して母畜を壁におしあてたりしていた。けさは、まったく一人っきりで作業をすすめなければならないので、こんな姿勢でつかまえているらしい。
この姿勢を意味するデレンデフは、さしずめ「乳くる」という動詞に相当しよう。俗に、女性を相手にした性的関係を意味することもありうる。ただ一般には、むしろ、他人とうまく関係をつけるという意味としてもちいられる。乳房という部位をつうじて、人間の社会関係行動を表現するのである。乳房をつかんでうまくやる、というわけである。
あきらかに、人が家畜とのかかわりにおいて発生した動作を表現していたことばがまずさきにあり、

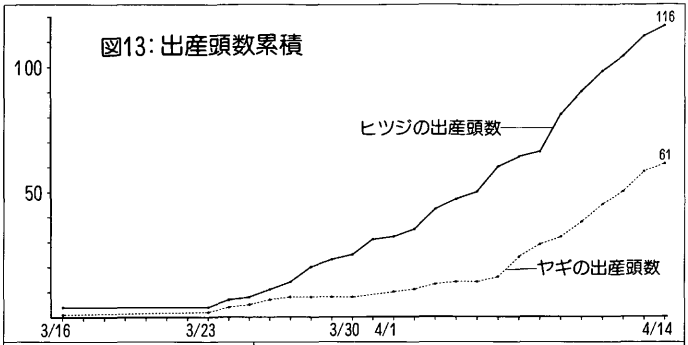
それが、人間関係のほうへと浸透している。人と家畜との相互干渉が、人と人とのそれに応用されている。乳房をつかむこの姿勢は、家畜とうまくやりながら、乳を搾取するという意味がひそんでいるように思われる。子畜のために「乳くる」のが、いつのまにか人のための「乳くる」になって、うまく関係をとるようになったとしても不思議ではない。そうした人と家畜の相互干渉のプロセスが、この語に反映されているのかもしれない。

三十日のあいだに、人びとはさまざまな姿勢で、母子関係に介入していた。母畜の角をつかんで、子畜の匂いをかがせるようとする姿勢。母畜を壁におしあてて、子畜の匂いをかがせまいとする姿勢。実の子畜をあてがっておいて、脇から別の子畜に吸わせる姿勢。実の子畜をかがせておいて、うしろから別の子畜をもってくる姿勢。歌をうたうときもある。

そうした多様な姿勢も、基本的には、二つに分類される。匂いをかがせているときと、匂いをかがせないときとである。匂いをかがせまいとして手でおおうのは、かならず実子でないからで、母畜を乳母としている場合。同様に乳母にしていても、実子がそばにいれば、匂いをかがせてだますことがある。乳母から養母にする場合は、実子でないものに実子のような匂いをつけてだます。実子の場合はもちろん、匂いをかがせる。匂いによる認知関係の修復につとめるためである。

このように、匂いをかがせないタイプは、かならず実子でないことと対応するが、実子でなくても匂いをかがせていくタイプが存在しており、匂いをかがせるタイプと連続した一連の介入として理解することができる。

これまでの介入を類型化すると、つぎの四つにわけられる。実母実子の認知関係がうしなわれたときに、これを修復するもの。実母のほかに複数の母から哺乳するという寄乳。実子をうしなった異母との


図13: 出産頭数累積
100
50
116
61
ヒツジの出産頭数
ヤギの出産頭数
3/16
3/23
3/30
4/1
4/14

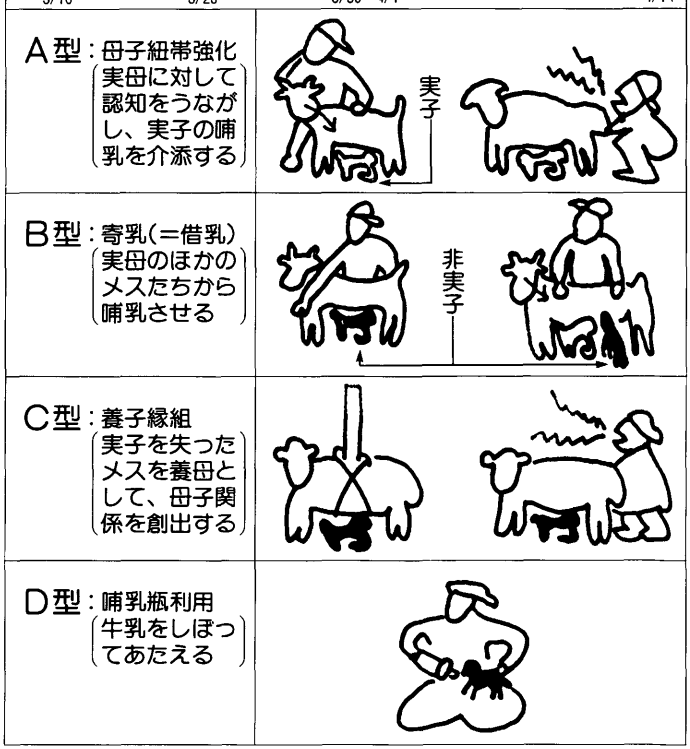

A型：母子紐帯強化
（実母に対して認知をうながし、実子の哺乳を介添する）
実子
B型：寄乳（＝借乳）
（実母のほかのメスたちから哺乳させる）
非実子
C型：養子縁組
（実子を失ったメスを養母として、母子関係を創出する）
D型：哺乳瓶利用
（牛乳をしぼってあたえる）

図14 の凡例

図14:母子関係への介入記録

		a[*1]	b[*2]	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
ヒツジ・ヤギの別		ヒ	ヒ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヤ	ヒ	ヤ	ヒ	ヒ	ヤ	ヒ	ヤ	ヒ	ヤ	ヤ	ヒ	ヒ	ヤ
介入契機	初産			○			○								○	○			○								○
	双子					○				○	○		○	○			○	○			○				○	○	
	その他の子嫌い				○																	○		○			
その他の乳不足								○	○																		
凍傷												○											○				
母なし		○	○																	○							
3／14																											
15																											
16																											
17																											
18																											
19																											
20																											
21																											
22		D	D																								
23		D/B	B/B	A	A																						
24		B/D/B	B/D/B			A	A																				
25		B/B	B/B																								
26		B/B	B/B																								
27		B/B	B/B																								
28		B/B	B/B																								
29		B/B	B/B																								
30		B/B	B/B					B	B																		
31		B/B	B/B							A																	
4／1		B/B	B/B																								
2		B/B	B/B																								
3		B/B	B/B								B	B															
4		B/B	B/B																								
5		C	B										AB														
6		C/C	B/B											C													
7			B/B												D												
8			B/B			↓							B/B	C		A/A	B/B										
9			B/B			B							A	B/B			B	B	B								
10			C/B																	B							
11			B										A			A	D	D	B	B	B	A					
12													D				B	B	B/B	B/B			B/B	A	A		
13														B			B/B	B/C	B/B	B/B			B		B/B	A/B/A	A
14																	C	C	B	BD					B		
15																											

※1. aはみなし子ヒツジ白鼻　　※2. bはみなし子ヒツジ黒鼻

養子縁組。哺乳びんで牛乳をあたえるオグジ。

これらのうち、オグジの方法はこのまれない。できるだけ乳母の利用が採用される。乳母のなかでも実子をうしなった乳母は、やがて養母になる。これらの介入は、たとえば、みなし子ヒツジの場合がそうであるように、個体別の経過をたどってみると、まさに一連の介入として連続している。実母がいない場合の連続である。

実母がいる場合は、乳不足のために乳をかりるケースと、認知不足のために認知を確立するケースとがある。両者は概念としてはそれぞれ別のものとして整理されるが、認知不足はしばしば乳不足でもあるので、両者は併用されやすい。その意味で、連続している。

実母がいる場合と、いない場合とでは、まったく異なるようにみえる。しかし、これもまた連続している。というのは、実母がいてこれとの認知を確立する場合と、養子縁組とは、まったく同様に「うたう介入」が採用されるからである。

介入の具体的な様子は、女性によって個人差があった。そうした詳細な個人差をこえて、なおひきだせる文化としての共通性とはいったいなんなのであろうか。なにがモンゴルらしい特徴なのであろうか。

いずれの牧畜文化においても、子畜の養育はおこなわれている。万一、母をうしなうようなことがあれば、子を死なせないために養子縁組もおこなう。たいてい、死んだ子畜の皮を養子につければよい。それほどむずかしい技術ではなく、どこにでもあるといえる。そうした養子縁組が、モンゴルの場合は、決して特例に対応する技術として単独に存在しているわけではない。そこが特筆されよう。

モンゴルには、母子関係のさまざまな状況に応じて、臨機応変にいろいろな姿勢をとって実践される多様な介入がある。それらは一連の体系的な技術を構成している。とりわけ、養子縁組が実母実子の認知関係を修復する作業と一致していることにみられるように、養育全体としての体系的技術が伝統的に

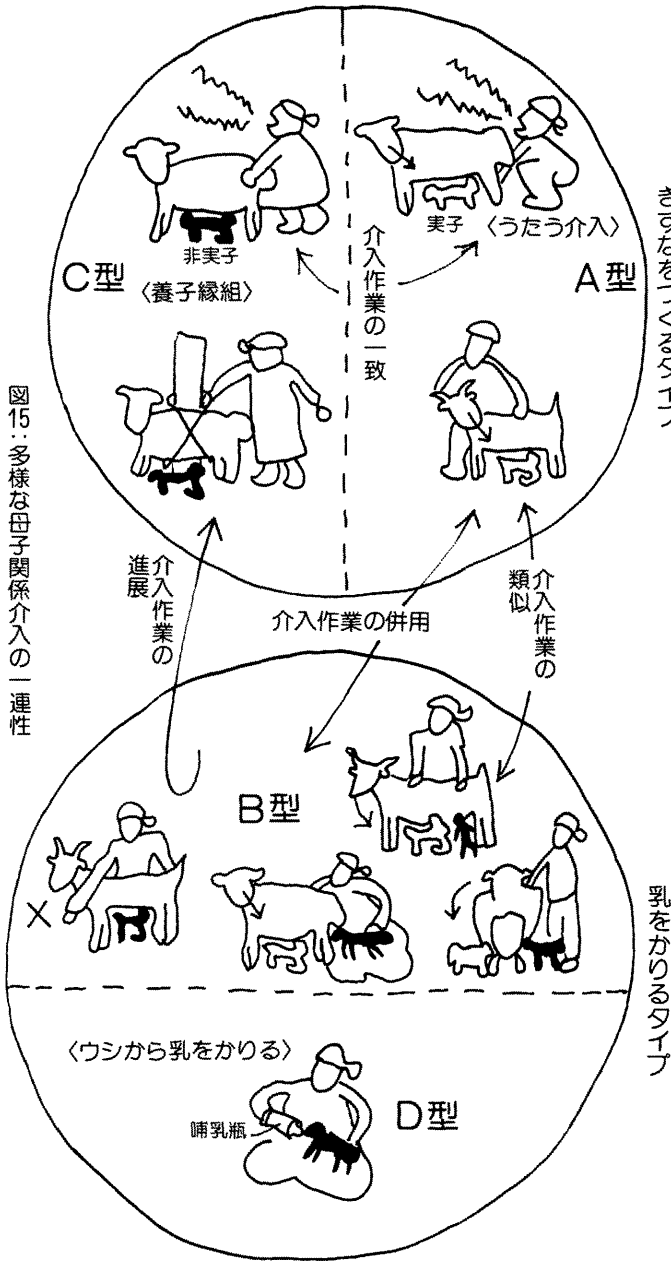


図15：多様な母子関係介入の一連性



哺乳びんで牛乳をあたえる

確立されている。

さらに、それが「歌」をともなっていることも特筆される。旋律性をそなえたある一定のよびかけは、しょせん余計なことである。よびかけなくても成立するのに、あえてよびかける。こうした「うたう介入」の過剰性にこそ、文化としての特徴がみいだされる。これほど念入りに、子畜の養育が重視されているのである。

モンゴルでは、子畜の養育にかかわる介入が、母畜へのはたらきかけとして認識される。かならずしも必要ではないのに、わざわざ歌までうたい、母畜によびかける作業として理解されている。ここには、ことだまの思想をうかがうことができよう。ことばをつうじて呪術的な力をひきだすという考えかたが、背後に存在していると思われる。なぜ、トイグやチャイグとよべば、母親らしくなるのだろうか。そのわけをだれも知らない。だれにもわからない。ただ、昔から決まっていて、うたがいようもなく、一定のよびかけが功を奏すると信じられているのである。

かつて人民公社の時代には、子畜養育の成績いかんが給料に換算された。百頭から百頭を再生産するというノルマがあって、それ以上にふえれば、ボーナスが支給された。だから、双子や未成熟メスの初産も歓迎された。質より量が優先した。そうした傾向が、現在の管理にも残存しており、双子率や未成熟メスの初産率が高いのかもしれない。しかし、そうした社会的要因は、量的な側面にかかわるにとどまる。頻度にかかわる要因であって、昔から「うたう介入」があったこととは関係がない。ことだまの力をかりながら、念入りにおこなわれる子畜の養育は、古くからの伝統であり、モンゴル文化の質的な特徴である。

念入りな子畜の養育は、搾乳にさきだつ乳の本来の目的に、とてもこだわった作業であるといえよう。人びとは、搾乳にさきだって、子畜のために、乳のやりとりに専念する。その結果として、去勢オスがたくさんいるという群れができあがる。モンゴルの場合、群れ構成におけるオス（去勢）の割合がきわめて高い。積極的にオスの子を屠殺する形式の牧畜と対比すれば、よりいっそうモンゴルの特徴が鮮明になろう。去勢オスが多いという量的特徴は、子畜の養育を重視する質的特徴と呼応している。

子畜の養育でさらに重視されているのは、母子のきずなである。母子のきずなを分断しても子畜の養育に専念することはできるであろう。積極的に哺乳びんを利用すればよかろう。しかし、モンゴルの場合は、母子のきずなをできるだけ強化することに執着する。群れのまとまり全体にとっても、母子のきずなが核となっている。

母子のきずなを強化して群れのまとまりをつくり、そのきずなによって養育をはかり、たくさんのオスを維持しつづける。ここに、搾乳によって乳を利用することよりも、狩猟から連続する肉の利用を志向した技術体系がよみとれるのではないだろうか。それが、遊牧の本質ではないだろうか。

モンゴルのことわざは、人と家畜をパラレルにして、

「泣いて泣いて人になる
　鳴いて鳴いて家畜になる」
という。母をもとめて泣く子どもと、母畜をもとめて鳴く子畜とを対句にする。個体としてうまれ、個体としてめだつ特徴が記憶され、個体史をきざみながら成長してゆくさまは、家畜も人もひとしいのである。

出発の日をいよいよ明日にひかえて、今晩はちょっとした宴会がおこなわれるはずだった。しかし、六時になっても群れがかえってこない。たくさんの出産があって難儀しているのだろう。なにしろ、いまこそが出産のピークなのである。弟のウニナーがウマにのり、遠方で出産した個体のところへいく。兄のウジチャが徒歩で、近辺にいる個体のもとへと出向く。兄弟が帰宅したころは、すっかり闇夜。宴会は中止された。